若越郷土研究
43の1

グリフィスと静岡のクラーク

山下　英一

明治四年に静岡が雇った米国人教師[1]クラークのことについて知る人は少ないと思われる。クラークは福井のグリフィスの推薦を受けてお雇い教師を志願したこともあって、同じ時代に福井と静岡という地方の城下町で、これら二人の英学教師がどのような関係で結ばれていったかを知ろうとするのが拙文のねらいである。

一

これに先だって最初に断っておかねばならないことがある。実は[2]クラークについての日本に於ける研究は、グリフィスの場合より時代の上からも内容的にもはるかに先行していたということである。そこで今ここにそれらの主なものを研究順に列挙し、簡単に紹介することから始めよう。

吉野作造の「静岡学校の教師クラーク先生」は、政治学者吉野が始めた明治文化の研究に一石を投じた好論文である。吉野は神田の古本屋で買った雑文綴込みの写本一冊のなかに、「静岡県住　美国クラーク」が、一八七二年九月の日付で書いた「諸県学校ヲ恵顧スルコトヲ勧ムル建議」の訳文を見つけた。クラークの建議は次のように始まる。「当時教育ノ利益ヲ東京ニノミ専ラ聚メ一ツニ会センコトヲ務メ玉ヘルハ、諸県学校ノ害トナリ大ニ気力ヲ喪ハシムルコトニ候間　日本内地諸県教育ノ事ニツキテ一語ヲ陳述致し候。」教育の東京集中化の弊害を欧米の例をあげて戒め、地方学校の優秀な人材の確保と育成を自らの静岡での経験から促す、といった意見書である。その結びはこうであった。「我等重テ又申上候。日本ノ望ハ少年ノ人ニ御座候。今ノ少年後必ズ日本ノ為ニ大事業ヲ為スベシ。而シテ闔国ノ学問ヲ好メル極メテ幼少極メテ卑賤ナル人ヲシテ、教養ヲ受ル十分自由ノ機会ヲ得セシムルヤウニコレ有リ度存ジ候。」

この偶然の建議写本の発見（原文については国立公文書館にもない）によって、強い関心を呼起された吉野作造は、少しずつ静岡のクラークについて知るようになる。[3]グリフィス（グリッフィスと吉野は記した）と同じラトガース（ラットガース）の同期生で、日本の招聘に応じたのは勝海舟から頼まれて、グリフィスが仲介の労をとったことも分かった。クラークは日本再訪の際、勝海舟を訪ねて幕府の大政奉還について訊ねたり、元静岡藩知事徳川家達に会いたい旨を頼んだりしたという記事などから、一九〇四年出版の[4]*Katz Awa "The Bismarck of Japan" or the story of a noble life* の著者クラークと、この人は同一の人でないか、と想像して行く。しかしそれ以上のことは分からないままに興味ある問題として残していた。

吉野がこの論文を発表した一九二七（昭和二）年の前年十二月にグリフィスは日本再訪をしていた。「昨今丁度グリッフィス先生が

来朝されて居るので」云々という文章が論文にある。というのもこれより五年前、吉野には[5]「グリツフヰスのこと」と題して短い文章があり、『皇国』（*The Mikado's Empire*）は日本をよく西洋に紹介したものとして、日本人の感謝に値すると述べていた。グリフィスについての日本人の記事なら吉野の先にもいくつかあるが、グリフィスの日本に関する最初の論文「維新論」（*The Recent Revolution in Japan*）の真随に触れ、これを正しく評価した紹介の文を書いたのは吉野が最初である。もっとも日本語による最初の紹介者は弁田豊であった。[6]弁田はグリフィスのこの論文が活字になった一八七五（明治八）年にすでに翻訳していた。この論文の骨子が「改革の真の因子は日本国民の歴史的精神に内在するの深きものあり」であるという吉野の洞察は、グリフィスの特色を見事に射貫いている。このことはクラークの建議で示した吉野の眼力についてもあてはまる。「グリツフヰスのこと」の結びは「グリツフヰスのことについてはその著書以外に僕は多くを知らぬ。多分まだ存命中なのであろう。未見の恩人として茲に僕は深厚なる敬意を彼に表しておきたい。」となっていた。

再びクラークに話を戻したい。歴史学者の大久保利謙は静岡市で開催の第六回蘭学資料研究会大会の公開講演で、クラークの建議を引き合いに出して、これを明治五年の「学制」の批判として紹介している。大久保の話は静岡藩の学問所と洋学者についてとくにクラークと中村正直に重点がおかれていた。吉野と違って、大久保はすでにクラークの『日本滞在記』（*Life and Adventure in Japan*, 1878）の日本訳（飯田宏、昭和四二年）などにより、クラークについて多くを知り得る立場にいた。クラークの契約書の条文にキリスト教宣教の禁止と、契約中は宗教について沈黙を守ることを命じた太政官の一条があった。クラークはこの一ヵ条を黙殺したどころか、契約不成立の事態を覚悟で、その条文の撤回を政府に申し送った。その三日後に条文削除の返事が届いた。それには勝海舟や岩倉具視の尽力があった。静岡に着くや最初の安息日にクラークは早速バイブル・クラス（聖書研究会）を開いた。大久保はこのことを重く視て、静岡の「明治文化」は、クラークによって蒔かれたキリスト教によって、新しい芽を吹きだしたと云う。クラークのバイブル・クラスが水源になって、一八七四（明治七）年九月二七日、[7]賤機舎（しずはたしゃ）の英学生一一名が、お雇い教師[8]マクドナルドの洗礼を受けるまでに至った。この若いキリスト者の群像がいわゆる静岡バンドであった。「建議」のなかの「大ナル都府ハ学問ヲ勉ムルニ宜シキ所ニアラズ、其故ハ大都府ニハ心志ヲ蕩散スルモノ甚ダ多ク、誘惑ノ事甚ダ多クシテ書生ノ道路ヲ回繞セリ、」云々の文章や、同じく「若シ始ヨリ学校ノ教育アラザリシナラバ今ノ生徒ハ生徒トナラズシテ懶惰ノ人トナリ、心霊ノ修養ヲ受ル機会ハアラザリシナルベシト存ジ候」云々のごとき文章から、学問所の理化学教師クラークというより、バイブル・クラスのクラーク先生の像が浮んでくる。この建議について大久保は「あまり知られておりませんので、やや長いのですが全文をご紹介いたします」といって、これを『静岡市史』第二巻から引用していた。残念ながら吉野作造の写しと表記上かなりの違いが見

られるのは、この出版にたずさわる執筆者の身勝手さであろう。

時代は下って一九九二（平成四）年、クラークがテレビに登場し、またもや「建議」がテーマに取り上げられることになった。テレビ静岡制作の「知られざる明治、もう一人のクラーク先生」である。「明治政府の教育政策に反対して書き遺した一枚の意見書」の現代に於ける意味を問い、それを書いたクラーク像に迫るもので、スタッフの入念な資料調査に裏付けられた見応えのある番組であった。テレビの画面に「学制」と同時に出された文部省の第一三号布達の通達文が写る。これは「維新以来全国の各藩、各県がそれぞれの地域で作り上げてきた学校を廃止する通達でした。」とナレーターの声。つづいて制作者の意図する「地方を顧みない中央集権の教育政策に反対」するクラークの主張をレポートする。番組では明治一二年の第一次教育令（起草者、文部省次官田中不二麿、ラトガース大学教授から文部省にお雇いのD・マレー）、昭和二三年公布の教育委員会法（公選制）にまで及ぶ。そして前者は通称「自由教育令」と呼ばれた。しかし強制しても子供を学校に行かせる「督促教育」の前に屈した。後者は昭和三一年、教育委員は地方自治体の任命制に変わって行ったと伝えている。「建議」のなかの「日本ノ望ハ少年ノ人ニ御座候」を中心に据えて今日の混迷する日本の教育を考えようとした、誠実味のあるテレビ番組になった。

吉野作造が発見したクラークの建議（一八七二年）の日本語訳写しについて一九二七年に発表した論文を、三七年後に大久保利謙が紹介し、さらに二八年たって、静岡テレビが映像のなかで意欲的にこれを取り上げるという経過をたどってみた。

二

今、これと似た例をグリフィスに求めようとしても不可能である。お雇い教師に始まり、帰国して牧師になったところまでは両者は同じ道を辿るが、その後、クラークはフロリダで農園を経営した。グリフィスは歴史家として同時代の歴史の著述に専念した。そのグリフィスにはクラークに不可能なことが出来た。それは自らの歴史考察という長い道のりを経て、歴史上の出来事が時と場合に応じて教訓になるように歴史の著作を通しても働きかけることであった。例えば黒船とペリーである。ペリーはグリフィスが日本について書き始めた最初の文章（前述した"*The Recent Revolution in Japan*"）からすでに登場した。そして晩年の著述にまで繰り返し、あたかも彼の日本観の原点を示すがごとく登場する。一八五〇年、グリフィスが七歳の時、フィラデルフィア市を流れるデラウェア河畔にある父の石炭荷揚付近から、アメリカの蒸気船サスケハンナ号の進水式を見物している。この船がペリー提督日本遠征の時の旗艦になる。このペリーに日本派遣を任命したアメリカ大統領ミラード・フィルモアのことが、歴史家グリフィスの意識に浮上するにはかなりの時間があった。グリフィスの『フィルモア伝』（"*Millard Fillmore*" 1915）の出版は同著『ペリー提督伝』（"*Matthew Calbraith Perry*" 1887）から二五年を経ていた。すでに一九〇五（明治三七）年一二月一五日、バッファロ市歴史協会の席上、グリフィスは一三代アメリカ大統領ミラード・フィルモアについて演説して、フィルモアを世界的視野で

再評価した。日露戦争終結のためのポーツマス条約の調印が行われたのは、一九〇五年九月五日であった。日本政府の希望で日露講和の斡旋にT・ローズベルト大統領があたった。グリフィスの演説は、そのアメリカが世界平和の原動力になることを願って行われた。それにはペリー遠征の目的を明記した「国書」（米国大統領フィルモアより日本皇帝宛の書翰）の内容を吟味して、話して聞かせることから始めた。グリフィスはフィルモアの証言を引用した。「半世紀前の日本のひどい牢獄、難破した囚人への残酷な行為のことを知っていた。そのためペリー遠征の提案は閣議の満場一致で可決された。」ここでグリフィスが強調したのは、攻撃されなければ暴力を使ってはならない。もしそうなった時は、油断のない島の住人に、彼等の相手は市民を守るに相応しい政府であることを、力でもって確信させる権限をペリーに与えたことであった。演説の結びはこうであった。「日本とアメリカの歴史を研究している立場から、日本遠征成功の栄誉はペリーと同じくフィルモアにもあることを信じて疑いません。ポーツマス条約のこの年にあたり、フィルモアの名を新たに過去の栄冠で飾り、未来において何かより良い方法が見つかるまで日本とアメリカは共に戦争回避のための最善の道を、ワシントンとフィルモアの教えに従って進むよう銘記しようではありませんか。」

この演説のおかげで、グリフィスはそれまで資料の少なかったフィルモアについて書く準備ができた。かくして「演説」から一〇年後の一九一五年、『フィルモア伝』の自費出版を見ることになった。フィルモア書翰が目的とする「友誼、通商、石炭及び食糧の補給、遭難者の保護」のうち、「演説」に於てはとくに、「遭難者の保護」が強調されたが、『フィルモア伝』では「友誼」が力説された。日露戦争の時代は、日本人が民族としての強い意識に始めて目覚めた。国外では黄禍論とあいまって、米国内の日本人移民が排斥されるなどの国家間の摩擦が強まった。国内では対外国意識の高まりと共にナショナリズムが台頭し、孤立主義の動きが国全体を覆ってきた。このような時、グリフィスはこの国の進化が結局、民族特有のとくに個人の精神的発展に外ならないことを知っていた。[11]日本の最大の危険は軍隊がその原因となると指摘していた。しかしアジア人種蔑視に抗して、反対にアジアを知るべしと同国人に謙虚に訴えるグリフィスの言葉は、その日本経験に根づいた長い間のたゆまぬ研究と、深い同情から生れたものであろう。

三

再びクラークにもどって、テレビ静岡の画面から享受した、興味ある二つのことを述べておきたい。前述したクラークの著書『海舟勝安房』は日露戦争の最中に出版された。クラークは時間に追われ、きわめて短期間でそれを書き上げた。アメリカ人の日本に対する理解と援助を期待したからである。出版後最初の六週間に一万部近く売れたという。その印税は、日本に関する講演で得た収入とともに「日本の孤児救援基金」につぎ込まれた。『勝安房』のなかにハーバード大学日本クラブで演説した男爵金子堅太郎の言葉が入っている。[12]「……この戦争は長く苦しいものになると分かっています。一人の兵士や水兵が戦場に取られると、その家族の面倒を隣近所や

村全体で見ることになるからです。地主はその家族からの小作料は取らないこととし、医者はその家族の病人を無料で診ます。またあとに残されるにちがいない幾千の未亡人と孤児を見越して、救援基金協会が国民の間から設立されて、その貧困のうちから一三〇万円をすでに寄付しています。」

一九〇五年一一月二〇日、ニューヨーク州イサカに住むグリフィスもまた「負傷した日本兵の為めの懇請」という見出しの呼び掛けをしている。「戦争は終ったけれども、何万人の傷病兵が苦しい入院生活を送っている。一九〇五年一〇月一日現在、日本国内だけでも三一、一五四人が治療中で、そのうち東京に六、三三三人いた。これらの気の毒な人を、助けるために版画、さし絵、クリスマスカード、イースターカードや、装飾的な郵便はがきなど、絵であったら何でもいい、それを集めて「直ちに」（私でなく）日本、横浜のヘンリー・ルーミス牧師へ郵送してくれませんか。米国への郵送料は二オンスにつき一セント。傷病兵の気持ちを和らげてあげることで、病気の身体を治すのに役立ててあげてください。」

クラークとグリフィスのこの援助精神のよってきたるところは、キリスト教にあった。『海舟勝安房』にこういう一節がある。「もしキリスト教が、この危急の事態にあたって救済の実行を欠くなら、日本から慈善の教師（宣教師）を引揚げた方がよい。日本人は試練に立たされている。同様にキリスト教国の我々もまた救済を実行するかどうかで試練に立っている。」

それでは「建議」や「救済基金」に見られるクラークの人格はどこで形成されたのだろう。静岡テレビの「もう一人のクラーク」ではそのことにも核心を衝いた取材をしていた。クラークは一三歳からラトガース・カレッジ入学までの少年期を、ニューヨーク州の州都、オルバニーで過ごした。父ルーファスはこの地で最古の第一改革派教会の牧師を務めていた。取材に協力したJ・K・フィッシャー氏（マカレスター大学歴史学教授）はルーファスの説教（クラークの生れた一八四九年前後）を入手した。それによると「奴隷制度に反対したばかりでなく、アメリカが領土拡大のために行ったメキシコとの戦争や、イギリスの中国への侵略戦争、アヘン戦争を、キリスト教徒として許せないと、信徒たちに強く訴え続けたのです」とナレーターの声。そしてフィッシャー氏は少年クラークも座ったというオルバニーの教会の席を紹介して、「ここで座ってお父さんの説教を聞いて、たいへんな影響があったと思いますね。」と話して行く。ラトガース・カレッジ学生のグリフィスは同級生でいずれもオルバニー出身の親友、クラークとR・Cプラインの家族と親しくして、たびたびオルバニーを訪ねている。プライン家はオルバニーの名家で、プラインの父R・H・プラインはハリス後任の駐日弁理公使（一八六一～六五年）であった。グリフィスの日記をのぞくと例えば次の記録がある。

1869 *June* 11. *At Albany, went to Prayn's House, refreshed, washed & Tea, walk, Prayer Meeting, Ice Cream.*

June 12. *Called on Mrs Clark. Took 9 o'clock boat arrived in New York at 6PM.*

オルバニーに着くと、プライン家を訪ねて、食事をいただいて元気になり、祈禱会に出る。

翌日はクラーク夫人を訪ねてから、九時の船でハドソン川を下って、午後六時にニューヨークに着くといった小旅行であった。とくにプラインの父とクラーク夫人にはいろんなことで相談にのってもらっていた。

四

勝海舟の依頼を受けて、グリフィスの推薦で来日することになったクラークから、手紙の束がとどいた。福井は一八七一（明治四）年一一月一二日の美しい秋晴れの日曜日であった。グリフィスは住込みの生徒といつものように聖書を読み、午後は府中の方へ遠乗りをしていた。クラークが二週間も前に横浜に着いていたことを知り、うれしくなってすぐ四枚も手紙を書いた。クラークはその長い手紙を横浜から一〇月二七日か二八日の郵便で送っていた。前年の一二月二九日、グリフィスは木造蒸気外輪船グレート・リパブリック号で横浜に上陸した。福井に着いたのは翌年の三月四日であった。それから八カ月経て友人の手紙と、日本上陸の知らせを受けたグリフィスの喜びは大きかった。二二歳のクラークは同じグレート・リパブリック号に乗って来た。その船中で綴ったグリフィス宛の長い手紙を紹介したい。これは万感胸に迫る思いで書かれたものであるだけに、お雇い外国人の新天地での仕事に向う様々な思いが読み取られよう。（⑴…⑼は手紙の記載。ⓐⓑⓒは筆者の分類。）

⑴ⓐ　クラークのお雇いについてもグリフィスの場合と同じくフルベッキ[14]とフェリス[15]が最も関与していた。オルバニーのプライン夫人がクラークに同行して来日できなかったことを横浜のバラ[17]とヴィーダー[18]が残念がっていたという。フルベッキは江戸の大学（南校）に欠員があり、クラークに補充を望んで、その来日を急いでいた。クラークを教師に雇いたいとの申込みは、日本各地からあり、越前の隣藩からもあったという。お雇い教師の新採用については、江戸のフルベッキとニューヨークのフェリスの間に緻密な連絡があった。それがプライン夫人に伝わりクラークの知るところとなる。杉浦[19]をはじめ日本の友人らもクラークの日本行を急がせた。かくして即刻、日本行きを決意した。

ⓑ　化学の学科に精通していて、その勉強に大いに興味があった。自分の関心をひくことを教えたくて、あらかじめ化学の教授に適当な器具と材料を準備することにした。ニューヨークで所持金の範囲内で各種取りそろえて、五個の大きな箱に詰めて、パナマ経由で横浜へ送った。二〇〇ドル要した。グリフィスの提案した化学薬品と器具はすでに送っていた。今はグリフィスの友情のおかげで、教師として駿河に招聘されて雇われたいと思う。

⑵ⓐ　クラークの知っている日本人学生で静岡出身の数人に、いろいろ質問する機会があった。そこで最善がつくせると思った。富士山にきわめて接近しているために、少し極端に暑かったり寒かったりするが、この「帝王の山」の近くにいるだけで、少し凍えたり、汗をかいたりするくらいは我慢する。日本の家に住む考えは好きで、慣れればなんとか快適にやって行ける。俸給について一言、「多過ぎる」。それに報いるだけの全力を仕事に傾けたい。過信せず、力不足を承知の上で、信用を得れば、引き受けた仕事を満足にやれると思う。生活と健康が与えられば、静岡の学校関係者が、クラークを信頼して間違いな

かったと思うはずだ。米国に於ける日本人との経験から、日本人が何を教えてほしいか、ある程度分かる。またオルバニーで日本人を教えたこともあって現在の日本の教育で、普通の学生に何が出来るかについても分かっている。

ⓑ ラトガース・カレッジで化学は特に好きでなく、他の学科ほど勉強しなかった。しかし化学が専門になってから、それに強く興味がわいてきて、化学一筋で行きたい。日本で使いたい教科書は、イエール・カレッジのバーカー教授の"*Barker's Chemistry*"で、クラークはこれにすっかり満足している。理論と実際に分かれていて、初心者に理論は難しいが、日本の学生にその習得の仕方を教えられると思う。実際の部分から先に教えるようにしたい。初心者向きの良書の一つ"*Hofmann's Chemistry*"を併用したい。実験に関する限り"*Bloxam's Chemistry*"が最良で、少し先へ行って大いに役立つだろう。グリフィスの使用する*Roscoe*の化学教科書はその様式が好きでない。

(3)ⓐ 物理では"*Wells*"の教科書が初心者向きに簡約である。"*Silliman's Physics*"も併用したい。仏語は自分で徹底的に試した"*Pujol & Van Worman*"を採用する。地文学は大好きな勉強だったので、教えたい。しかし数学は得意のユークリッド幾何学か記述幾何学なら難なく教えられるが、代数、算数は嫌いなので教えたくない。兵法を望まれれば教える用意がある。もちろん静岡の学校のことを顧慮した、あくまで実行したいと思えるような決まった計画は全くない。仕事は事情や生徒の学力の程度によって左右されるだろう。最初に生徒が何を最も必要とするかを正しく確かめてから、自分の力の及ぶ限り生徒の希望や要望を満足させるよう努力したい。始めからあまりやり過ぎずに、仕事に慣れるに従って少しずつ多く教えていって成果をあげたい。多くの失意を予測しなければならない。あの最も模範的な徳である忍耐を要する幾多の機会があると思う。なかでもいつもがっかりさせられるのは言葉の難しいことで、良い通訳がいないと困ってしまう。数年、日本にとどまるつもりなら、苦手の言葉も知らないといけない。それには二、三カ月、江戸で日本語を勉強し、教える準備をする余裕があればと思うが、殆んど不可能なことだ。

ⓑ 日の沈む国、日本のおかげで、クラークの想像力に明りがともされ、夢はそのおとぎの国を駆け巡り、詩的空想が途方もない高さにまで舞い上がった。その日本へ行こうという思いが、誇張のない散文、ありのままの現実の世界となってきた。しかしクラークの経験と気持はある程度、グリフィスのそれに包まれていたので、そう驚きはしなかった。またプライン夫人の経験もクラークのものになった。この二人によって大陸と大洋を渡る長い想像の旅をしたので、現実にそうなってみると、それがあたり前のことに思えた。長いことクラークは自分が不安で疑わしかった。と同時にあらゆる同情と興味が日本に向って湧いてきた。

(4)ⓐ グリフィス宛の手紙の他に、プライン夫人、ピアスン夫人、ブラウン夫人、フルベッキ夫人への手紙をトランクに預かってきた。また日本人の手紙で江戸、横浜、長崎、佐賀（肥前）、鹿児島（薩摩）、大阪、静岡などへ行くのも預かってきた。クラークをフ

ルベッキに紹介する、丁寧で申し分のないフェリスの手紙、ブラウン牧師、シェパード大佐（アメリカ領事）宛の手紙。しかしクラークにとって最も貴重な紹介状は、日本人の友達の書いた二通で、それは勝安房に宛てたものだ。一通はアナポリスにいる勝[20]の息子、一通はロング・アイランドのフラットブッシュにいる学生からであった。静岡の重要な人への手紙。名倉[21]と林[22]（オルバニーにいる）から、駿河で医者をしているそれぞれの父に宛てた手紙。アサヒは江戸の父にあてた短い手紙をくれて、訪ねてくれと頼んだ。杉浦はクラークの役に立つ手紙を数通くれた。オルバニーの日本人の友達、勝木、村地[23]、木滑[24]、名倉、林、トロイの長谷川[25]、ニューブランズウィックの日本人学生らの手紙も預かった。これらの手紙は、日本で接触する人たちと友好を結ぶのに役立ってくれると思う。

ⓑ　米国にいる日本人が、いかにクラークのことを思っているかをよく知っているので、日本へ行っても、日本人の心を引きつける自信があった。クラークが日本へ行くと聞いた日本人の一人は、それは日本のためにはうれしいが、自分のためには残念といったと云う。出発に先立ち、勝木と木滑は剃刀から何もかも備った化粧道具入れをくれた。少なくとも一五ドルはしたに違いない。村地には八乃至一〇ドルもするペン（金のペン先）をもらった。名倉も金ペンを贈ってくれた。トロイの長谷川は、自分の写真と親切な伝言を送ってきた。杉浦はクラークに会いにオルバニーまで来た。杉浦は時間がなくてプレゼントを選べなかったことを詫びて、恩になったしるしに、二、三〇ドルの金銭を受け取ってほしいと無理強いした。勿論ことわったが、お返しにヨーロッパから何か持って帰ろうと云う。杉浦は高潔な男で親友の一人。天皇の政府から直ちに帰国するよう、三度目の呼出しを受けていた。彼は仕方なく書物などを荷造りして送った。帰国前に杉浦は再びヨーロッパを訪ねたいと言っていた。そこで英国、仏国、スイス、イタリア、エジプト、パレスチナ、インドなどを経由して日本へ行くことにした。出来るだけ完全な旅行にしたいので、クラークに路線を立ててもらった。最初、杉浦をクラークと共に日本へ行かせようと、全力でやってみたが、彼のヨーロッパ観を変えることは出来なかった。結局、クラークが太平洋横断に出発した頃に、杉浦は大西洋を横断することになった。二人は世界を廻って再び会うために、互いに愛情のこもった別れのあいさつをした。アズマ[26]（ブルックリンの貴公子）、柳本[27]ら数人の日本人が、杉浦についてヨーロッパ旅行に出かける。翌年、日本に着くだろう。

⑤ⓐ　クラークの知る限り、グリフィスに送られる伝言は多くて優しいものばかりだという。フィラデルフィアにいたとき、かわいいグリフィスを、愛する息子であると要求するママが二、三人いることを実の母に話したことがあった。するとその母は自分の子が家族外の人に可愛がられるのをよろこんで見えた。グリフィス少年はその家庭のアイドルであった。グリフィスのことをたえず思っている多くの人からの手紙を運ぶので、それらを読んで伝言の大意をつかんでほしい。クリーヴランド夫人、シェイド夫人らは思い出とともに、グリフィスの幸福を熱心に望む気持ちでいっぱいだという。クリーヴランド夫人は

手紙のなかで、グリフィスにパンプキンパイと感慨無量の気持を送りたいと切に望んだ。彼女はグリフィスとクラークが帰るまで、毎年、感謝祭のディナーに二人の席と食器皿をとっておく。赤すぐりの実のゼリーを一二カップ分も送りたがった。グリフィスの食べものについて心配していた。グリフィスのために毎日、光の天使のように祈り、母たち天使の集りで、昼の集会には二人のために祈るという。ニューブランズウィックのシェイド夫人は自分のこと、家族のこと、ベアード通りへ転居したこと、グラマースクールのこと、息子たちのことについてグリフィスに話してほしいという。息子のフランクがラトガース・カレッジに入学したこと、キリスト教徒になろうとしていること、夫人がグリフィス氏のために祈っていること、グリフィスの名が家族の一員の言葉になっていること、グリフィスの影響をうけたフランクが、一九ページの父親らしい良い忠告をグリフィスからもらってどんなによろこんでいるか、グリフィスが立派になって行ってほしいなど、覚え切れないほどいろんなことを話してほしいと云われた。

ⓑ フィラデルフィアのグリフィスの家は、楽しく明るい思い出の場所であった。グリフィスの姉[27]マギーが弟のように両腕で迎えてくれた。マギーや他の魅力ある妹[28]たちと、真夜中になっても離れるのはつらかった。母親と長い間、実に楽しく話した。父親に会って、おそくまで一緒にいて楽しかった。マギーとクラークは昔のいろんな思い出にふけった。マギーがいよいよ日本に行くことを決心して、グリフィスとクラークといっしょに世界をまわるような日が来た時、二人で見る未来のいろんなすばらしいことを想像した。妹たちも行きたいと云う。姉妹のアイドル「ウイリー」（グリフィス）と別れたあとで、大切な姉を失うことに同意しないだろうから。またはっきり分かってはいないが、マギーは近いうちに日本に行くことになるかも知れない。心はすでに日本に向いていて、家事のやりくりがなければ、海の向うによろこんで飛んで行って、愛するグリフィスとしばらくいっしょにおれるのにといっていた。マギーはすばらしい女性で、グリフィスがマギーを誇りに思うのも無理はない。クラークはマギーがプライン夫人の献身的な仕事に参加するよう望んだこともあった。

⑥ⓐ サンフランシスコの夜は、スティヴンス夫人と娘たちを訪問して楽しかった。航海の無聊をなぐさめるために、一本の上等なカリフォルニア・ワインをもらった。グリフィスへよろしくとのことであった。夫人と会って、かってジュネーブで過した楽しい冬を思い出した。楽しい順調な旅。九月一六日土曜の早朝オルバニーを出発。クラークの母がナイヤガラまで同行した。そこで二人は最後の安息日を過す。バッファロで母、妹リジー、弟とワイコフ夫人に別れを告げた。オマハで一日。オグデンに日曜の午後に着く。九月二五日、ソルトレーク市。サンフランシスコ到着は九月二七日夜、グランドホテルに一泊。三〇日正午出航した。これまで楽しい航海がつづく（最初の二日間は殆んどの乗客は船に酔った）。太平洋の船はすごく快適で便利だ。大西洋の船は顔色なしだ。乗客の宣教師のうち一一人は中国へ、他はインド、シャムなどへ向う。彼等は「北支、中支」、「北イン

ド」「シャム」などについて、面白く為めになる講義を数回してくれた。内容はこれらの国での宣教師の活動についてだけでなく、これらの国を自然科学、社会、知性、道徳の各面からも論じたものだった。安息日ごとに礼拝を持ち、各派の牧師が式を行った。毎夕食後、小さな祈禱会がある。若い婦人や若者もたくさん乗っていて、楽しい音楽もあり、大そうにぎやかであった。子供が好きになってしまった。とくに中国生れの二人の少女とヴィーダー夫人の二人のかわいい娘が好きになる。夫人は江戸にいるヴィーダー氏と再会に行くところ。非常に愉快で面白い婦人。数人の婦人は横浜で下りる。

ⓑ　杉浦は日本に帰ったら、グリフィスに頼まれたことに最善をつくしたいといっていた。それはグリフィスが執筆中の「化学」を日本語に訳すことで、日本の科学精神がそれによって大いに啓発されると杉浦は期待していた。「しっかりやってくれ」とクラークはグリフィスを励ます。そして彼のこのような著述が、日本にすぐれたものを生み出すことになるのを望む。ただ炉に鉄を多く入れ過ぎぬよう（一度に多くのことに手を出さない）。これから化学の勉強をつつましく試みる静岡の能力の低い人たちが、グリフィスの貴重な仕事の日本語初版を入手する特権が与えられるものと期待する。そうでないと、杉浦が訳すると約束した米国の化学書で勉強させるよう努めるしかない。科学を他国の言葉の世話にまかすという、これは愉快な仕事だ。

⑺ⓐ　木滑のこと。グリフィスが福井の学校からクラークへ送った若者。彼の勉強を手伝ってみてオルバニーの見事な役人のようだと思った。大いに満足して、うまくやっている。今、イースト・グリーンブッシュのアンダーソン牧師のところにいる。そこへ木滑を出す前に、村地をそこへやって様子を見た。村地は急速に進歩した。そしてすべてに満足した。木滑は直ちにそこへ行きたがった。アンダーソン氏と打ち合わせして、木滑は日に二回、徹底的な個人教授を受けることになった。賄についても十分な打合せをしたので、木滑はよろこんだ。熱心に学んだ。母は木滑が好きになり、その腕をとって歩いて教会へ行くので、女性が親しそうにそばにいるだけで彼はびっくりした。最初、オルバニーに来たとき、クラークの家に泊った。いつも彼はベルを鳴らさず走って入ってきて、客間や二階寝室など、どこでも突然現われた。或る日の午後、母がふだん着のままソファでねむっていると、突然、五人の日本人の出現で目が覚めた。木滑が母に会わせるために案内してきたのだ。日本人はクラークの家にすっかりくつろぎ、まるで自分の住んでいる家のように、好きなところを歩く。父も母も日本人に大いに関心があり、誰でも世話をかける者がいるのが楽しみだった。

ⓑ　グリフィスの家に住む手島[29]もクラークに手紙を数通出した。『ヘボンの辞書』[30]を入手することの重要性を知っていた。しかし入手出来なかった。勝木が一冊持っていた。返すなら貸そうといってくれた。その辞書は肥前、佐賀の学校の所蔵であった。しかし勝木が毎日使っていて、それをあきらめるには、彼が大きな犠牲を払うことになるので受取らなかった。もっと早くその辞書が望ましいと知っていたら、ニューブランズウィックで高木[31]から一冊手に入れることができたろうが、

グリフィスからの手紙をもらった時ではおそすぎた。

ⓒ グリフィスから工場や化学薬品商会を訪ねるように言われたが、そこに入るのは難しかった。こういう所の経営者は、他人にその架空の「秘密の製法」を知られたくないのでびくびくしていた。クラークが訪ねたかった硫酸、窒素酸化物の工場からは締め出された。ロング・アイランドのガラス製造を訪ねた。いろんな機械に多少詳しくなった。しかしこういうことを十分に理解するには、まず観察しなければいけない。木滑からグリフィスがいかにして実験を処理し、それを見せるためにどんなに驚くべきことを企てたかについて彼の鮮明な考えを聞かせてもらった。彼はまた運不運についてクラークに分からせて喜んでいるように見えた。自分の見たあらゆるおかしいことを思い出して心から笑った。グリフィスを大へん評価して、彼が生徒や福井の人にいかに人気があり、みんなから大へん好かれているとクラークに話そうと努めた。

(8)ⓐ クラークはグリフィスと共有の喜び、経験に関連して、楽しくふり返れることが多い。まだ期待できる多くのことがあり、二人で喜べることは疑いもない。神がこれまで大いに二人の運命を共にして下さったようだ。これからも、互いに同情の根源となり、助け合いなぐさめあうようにと、これも神の意向である。クラークが日本に上陸して出会う大きな試練は、グリフィスにおそらく長い間会えないことだろう。なつかしいグリフィスと同じ土の上にいると感じても、彼のがまん強い表情に会えないのはつらいと思う。グリフィスに会って抱き締めたい。クラークがヨーロッパから帰った時、メトロポリタン・ホテルでしたように。会いたい。グリフィスの家で、学校で、グリフィスを取り巻くあらゆるところで。米国で心配している人達みんなに、グリフィスがどのように見え、どのようにして眠り、何を食べていて、何をしているか、あらゆることを書けたら書きたい。福井へ走って行って会えるか。それともそんなに遠いか。いや、おそらくグリフィスが江戸に訪ねて来るだろう。福井を訪ねることは不可能だろう。

ⓑ 横浜か江戸に着くとすぐ、クラークが何をすることになるか、何時からその仕事を始めるかの満足のゆく取り決めを、即座にする必要がある。出来れば、勝安房との会見を求める。静岡行きについてグリフィスと明確な条件に達しているかを確かめたい。グリフィスと勝の間で、これがすべて取り決められているなら、グリフィスのしたことに同調しよう。契約はうまく行くと信じる。勝安房のこと、最初に何をするのが一番よいかについて、フルベッキ氏に問合わせる。静岡が急いでいなければ横浜か江戸に一月までいて、日本語などを学びたい。しかしこれに出費が相当かさむなら、資金減となって困った問題が生じる。現在のところ、財源の規模が低いからである。最初に父から五〇〇ドルを借りた。快適に日本にやって来るのにかろうじて足りた。この借金はいつか利子をつけて返済できる。ニューヨークのベンジャミンへ化学薬品の代金一五〇ドルを現金で支払い、五〇ドルの借りがある。化学薬品と器具の箱の送料は一〇〇ドルもする。日本へ自分と薬品を運ぶのに、総計八〇〇ドルを支払ったことになる。

(9)ⓐ クラークの旅費はおそらく支払われ

ないとグリフィスがいった。最初から困らないように「乗り出し」の金が、少し確保できれば、旅費のことはほとんど気にしない。化学薬品の箱はすぐクラークの手を離れて、日本人から次の船で着く箱の送料を払ってもらい、さらに薬品代二〇〇ドルをもらうように取計らいたい。それからベンジャミンへ、日本から払うと約束した五〇ドルを送る。残りの一五〇ドルは、江戸で一月まで勉強するのに使いたい。それから後、父へ五〇〇ドルの返済を送る。箱がおくれたり、すぐ箱を引き取ってくれないなら、どこかで少し金を借りなければならない。しかしもし旅費が払ってもらえれば、化学薬品と器具を提供する。

ⓑ　プライン夫人がひどい事故にあった。全快していてほしい。横浜に着いたらすぐプライン夫人とバラ氏に会いに行く。グリフィスの仕事は思うように進み、うまく行っていると思う。なつかしい人のいない孤独に負けないでほしい。故郷の友人や交際から長い間離れているのはつらい。神がグリフィスの仕事を祝福し、強くて満足な心でいられるよう祝福して下さいますよう。東洋の国には、人を落胆させることが多い。しかし強い信仰を保ち、はかない望みをかけて行かねばならない。一つの手紙にたくさん書いたので、あとは別の機会か、面と向かうまで残しておく。クラークのあいさつと友情を受けてほしい。一八六九年度卒業生、モンブラン、富士山、科学と真理の達成、来るべき生活、グリフィスの好むことなど、いつもクラークはグリフィスと共にあることを信じてほしい。

以上がクラークの長い手紙の内容である。一人称を三人称にして客観的文体に直してみた。だから筆者の取捨が働く部分もあり、またほとんど翻訳の部分もある。いずれにしてもクラークは全体で㈼あるうちの最初から㈠、㈡と思いのままに書いて行った。その一つ一つが不思議とほとんど二つの内容に分かれていて、そのどれもが言いたいことを明確に伝えていた。用件を述べるというより、グリフィスに何か語りたくて仕方がない。だから文章に書き手の若々しい情熱が感じられる、魅力ある手紙となった。

歴史研究が過去の出来事をありのままに再現して、それに歴史的見解を与える言葉の上の作業だとすれば、これから始まろうとする出来事に対する、理想、希望、想像をかかげた物心両面の準備もまた、歴史以前の歴史と読んでもいいのではないか。その意味でクラークの手紙は、明治初期の日本の教育に荷担した、米国青年の心境を赤裸々に綴っていて、日本が外国から教師に頼んだ青年のなかに、こういう気持や考えを持って、海を渡ってきた者のあることを教えてくれる。後にしてきたもの、これから先に待つものへの考えが、新しい歴史を作ろうとする者の見えざる予備行為となってその肩にかかっていた。困難も挫折も分らぬではなかった。しかし、それ以上に希望があった。クラークの手紙はそういう青年像を垣間見せてくれる。それはまたグリフィスについても同じことをいうことが出来た。

一九九七年三月、筆者はラトガース大学図書館のグリフィス・コレクションで研究していた。その間、クラークの故郷、オルバニーを訪ねた。ニューヨークからハドソン川に沿って、電車で約二時間半、北上すると雪のオ

ルバニーに着く。*Albany County Hall of Records* で父ルーファスの第一改革派教会、クラークの墓のあるルーラル墓地などを教えてもらった。雪に埋もれた墓に詣でてきた。クラークの手紙に登場したオルバニーの日本と米国の青年群像のことをもっと知りたいと思った。今回の筆者の文章はまだその端初にすぎない。静岡テレビ製作「もう一人のクラーク」の演出を担当された佐藤正樹氏にこの拙論を読んでいただきたいと思う。

註

(1) *Edward Warren Clark*(1849～1907)。ニューハンプシャー州ポーツマス生れ。ラトガース・カレッジ入学。少年時代の不慮の出来事で、両眼をひどく傷めて、数回の手術を必要とした。これが生涯、クラークを不利な地位に置いた。ジュネーブの神学校で*Dr. Merle d'Aubigne*の下で二年間、神学を学ぶ。一八七一―七三年静岡、一八七三―七五年開成学校で化学と物理を教えた。一八七四年、宮中で天皇一家に講義する光栄に浴した。一八八一年、フィラデルフィアで牧師になる。晩年はフロリダやテネシーに住む。共和党員。大の徒歩旅行者であり、登山者であり、乗馬好きであった。一八七八年、ルイーズと結婚。子供は男四人、女四人。旅の楽しい道連れ。おもしろい人。熱心でしんぼう強い学生。新しい企画に富む人。しかし見たところ移り気で不安定であった。これは生涯、苦しんだ眼病からくる恐ろしい神経の過労によるものであった。（ラトガース・カレッジ「一八六九年のクラス」からグリフィスの*'Edward Warren Clark'*に拠る。）

(2) 吉野作造「静岡学校の教師クラーク先生」（「新旧時代」一九二七年）。
同「再びクラーク先生に就て」（「新旧時代」一九二七年）。
小澤三郎『日本プロテスタント史研究』（東海大学出版会　一九六四年）「第8章　中村敬宇とキリスト教　第三節　EWクラークとWEグリフィス」。
E・W・クラーク著　飯田宏訳『日本滞在記』（講談社　一九六七年）「E・W・クラークについて」。
大久保利謙「明治初期文化史上における静岡―静岡の明治文化」（蘭学資料研究会「研究報告」第二一七、一九六九年）。

(3) *William Elliot Griffis*(1843～1928)
参考。山下英一『グリフィスと福井』（福井県郷土新書　一九七九年）グリフィス著　山下英一訳『明治日本体験記』（平凡社東洋文庫一九八四年）山下英一『グリフィスと日本―明治の精神を問いつづけた米国人ジャパノロジスト』（近代文藝社　一九九五年）。

(4) 一九〇八（明治三七）年、ニューヨーク*B.F.Back&Company*出版。縦一四センチ、横一〇センチ　九五頁。写真版一〇葉。

(5) 「新人」一九二二年。

(6) 山下英一『グリフィスと日本』第二章(一)『維新外論』考　(二)『日本近世変革論』考。

(7) 洋学伝習所廃止後の私設学校。

(8) *Davidson MacDonald*(1836～1905)カナダ出身の宣教師。

(9) テレビ静岡製作の「知られざる明治　もう一人のクラーク先生」一九九二年放映。第一回FNSドキュメンタリー大賞受賞。

(10) 大羽綾子抄訳『ペルリ提督遠征記』（酣燈社　一九四七年）

(11) *William Elliot Griffis "The Japanese Nation in Evolution"*1907

(12) *"Katz Awa" pp.*70～73

(13) ラトガース大学アレキサンダー図書館所蔵グリフィス・コレクション。「グリフィス・ジャーナル」。

(14) *Guido H.F.Verbeck*(1830～1898)アメリカ・オランダ改革派教会宣教師。

(15) *John M. Ferris*(1825～1911)アメリカ・オランダ改革派教会外国伝道局総主事。

(16) *Mary Pruyn*(1821～1885)アメリカ婦人一致外国伝道教会宣教師。

(17) *James H.Ballagh*(1832～1920)アメリカ・オランダ改革派教会宣教師。

(18) *Peter W.Veeder*(1825～1896)アメリカ・オランダ改革派教会会員。

(19) 杉浦弘蔵（畠山義成）鹿児島出身。ラトガース・カレッジ理科卒。開成学校長。

(20) 勝小鹿　静岡出身。ニューブランズウィックのグラマースクール卒。アナポリス海兵。海軍少佐。

(21) 名倉納　静岡出身。ニューブランズウィックで医学を修める。陸軍軍医。浜松藩の学者名倉松窓の子。

(22) 林糾四郎　静岡出身。

(23) 村地才一郎　佐賀出身。征韓派として活動。

(24) 木滑貫人　福井出身。沼津兵学校。

(25) 長谷川雉郎　姫路出身。南校派遣。ニューヨークで没。

(26) 華頂宮博経　皇族。海軍少将。

(27) 柳本直太郎　福井出身。華頂宮随行。開成学校。名古屋市長。

(28) *Martha*(1842～1923)　*Mary*(1846～1909)

(29) 手島精一　沼津出身。教育博物館長。工業教育。

(30) 『和英語林集成』"*A Japanese and English Dictionary*" 日本最初の和英辞書。J・C・ヘボン(*Hepburn*)が一八六六（慶応二）年、上海で刊行した。

(31) 高木三郎　庄内出身。ラトガース・カレッジ。米公使館書記官。

註をつけるにあたって次の著書を参考にした。石附実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房　一九七二年）、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館　一九八八年）。